

専如門主は、「念佛者の生き方」において、テロや武力紛争、経済格差、地球温暖化、核物質の拡散、差別を含む人権の抑圧など、世界規模での人類の生存に関わる困難な問題に取り組むことの重要性を指摘されました。

これを受け、浄土真宗本願寺派（本山・西本願寺）では、昨年11月には築地本願寺で「次世代リーダーズサミット「仏教×SDGs」を開催し、さらに、本年4月からは『く貧困の克服』に向けて、Dāna for World Peace～～「子どもたちを育むために」を実践の目標として、取り組みを始めました。また、全日本仏教青年会など伝統仏教界や宗教界でもSDGsに学び、取り組みを進める活動が広がってきています。

今即ちは、元自身のお寺でもSDGsについて考える場を作るなど、SDGsの活動にいち早く取り組んでいらっしゃる中平ア悟さんに、SDGsについて分かりやすく紹介いただきます。



▲ SDGs (持続可能な開発目標)

身近なものから考える

突然ですが、今、身の回りにあるものを何かひとつ、手にとめてみてください。そして、少し想像を広げて、考えてみましょう。それはどこで作られたものでしょうか。材料・原料に何が使われているのでしょうか。それはずっと使い続けられるものですか。役目を終えた後は、再利用される資源になるでしょうか。あるいは、どこかに積み上げられ、放置されてしまう「ミニ」になるのでしょうか。

SDGs—17の目標、169のターゲット

2015年の国連サミットで、2016年から2030年ま

日本でもさまざまな取り組みが

17の目標については上図のようなカラフルなパネルがよく知られています。冒頭に教えていただいた、身近なところから、将来の世界を想像する」と、今だけではなく、ずっと先まで見通して何をすべきか、何を選ぶべきかが非常に大切なっています。

その過程には、どのような人が関わり、影響を受けているのでしょうか。

身の回りにあるものでも、想像力を広げることで、広い世界や多くの人のつながりを考えるきっかけになります。大げさに聞こえるかもしませんが、想像を広げて考えることは、無意味なことではありません。むしろ、これから世界の行く先を考える上で、世界の関係を考える」と、世界中に想像を広げてみると、100年後、1000年後の世界を想像することはとても大切なことです。

今、世界はそういった視点に立つて、これからどのような未来をつくっていくか、何をすべきかをみんなで考えようという動きを起こしています。そういう視点や考えに立つて、定められた国際的な目標が、SDGsなのです。

SDGsには、「地球上の誰一人として取り残さない (leave no one behind)」という力強い誓いが掲げられています。これは、発展途上国、あるいは貧困やさまざまな社会課題の当事者のみならず、世界全体、すなわち私たち一人ひとりが、取り組んでいくべき課題であるとされています。

SDGsには、「地球上の誰一人として取り残さない (leave no one behind)」とい

ます。最近では、テレビや新聞、街の広告等でもこのパネルとSDGsを掲げた取り組みを目にします。世界中で、この取り組みが行われ、日本でも、政府や行政機関に限らず、さまざまな企業や団体が多様な取り組みを進めています。外務省のホームページなどには、その取り組みが紹介されています。皆さんご存じの企業や団体名から、ローカルな団体や学校などの取り組みまで紹介されています。是非、一度ご覧ください。

「持続可能」ということ—このままでは「持続できない世界」

この「持続可能な開発目標」が設定された意味について、少し考えてみましょう。私たち人類の歴史は、「発達」「開発」「成長」の歴史でもありました。科学技術の発達、経済成長、技術革新。それによって多くの恩恵がもたらされ、私たちも先進国としての物質的な豊かさを享受して暮らしています。

しかし、その開発や発達、物質的な豊かさは、ある問題を抱えたものであったことも既に知られています。開発の裏にある自然や環境の破壊、公害等の健康被害の原因となっ

たるものもあります。また、現代社会の生活に不可欠な電気、ガス、石油といったさまざまなエネルギー資源も無限ではありません。近い将来に枯渇する可能性が指摘され、代替エネルギーや、新しい技術開発が求められています。

「持続可能」が目標とされる背景には、この世界は「このままでは持続不可能である」という危機感があります。

「持続可能」が目標とされる背景には、この世界は「このままでは持続不可能である」という危機感があります。

た、その経済成長にはどこまでの開発が許容されるのでしょうか。あるいは逆に、環境の保全のために、何をあきらめるべきなのでしょうか。それらの調整はどのように行われるべきでしょうか。それは、さまざまな権力や経済力による力関係や、上からの押しつけられた目標ではなく、話し合い・意見交換を行い、合意形成を図らなければなりません。

言い換えると、どのような社会を求める、どのような未来を作っていくのか、それは、私たち一人ひとりが、主体性をもって考え、語り合い、関わる中で作り上げていくべきことといえるのです。

これから幸せは?

これから幸せは? これは、私たち一人ひとりが、SDGsをよく見ていくと、しばしば対立的な関係になる目標があります。たとえば、目標8では経済成長が、目標9では産業技術革新が掲げられていますが、その一方で、目標13、14、15では、気候変動への対策、あるいは海、陸の自然保全が対象とされています。これら「経済成長」と「環境保護」は、両立するケースもあります。しかし、多くの場合、開発と自然保護は対立する関係になりがちです。これまでの経済成長をめざすべきなのでしょうか。ま

たのではありません。しかし、実際にはその先に続く未来までを見通して、続けていくことができる(持続可能な)形で、丁寧に暮らしていくこと。そういうことが強く求め

ます。最近では、テレビや新聞、街の広告等でもこのパネルとSDGsを掲げた取り組みを目にします。世界中で、この取り組みが行われ、日本でも、政府や行政機関に限らず、さまざまな企業や団体が多様な取り組みを進めています。外務省のホームページなどには、その取り組みが紹介されています。皆さんご存じの企業や団体名から、ローカルな団体や学校などの取り組みまで紹介されています。是非、一度ご覧ください。

「持続可能」ということ—このままでは「持続できない世界」

この「持続可能な開発目標」が設定された意味について、少し考えてみましょう。私たち人類の歴史は、「発達」「開発」「成長」の歴史でもありました。科学技術の発達、経済成長、技術革新。それによって多くの恩恵がもたらされ、私たちも先進国としての物質的な豊かさを享受して暮らしています。

しかし、その開発や発達、物質的な豊かさは、ある問題を抱えたものであったことも既に知られています。開発の裏にある自然や環境の破壊、公害等の健康被害の原因となっ

たものもあります。また、現代社会の生活に不可欠な電気、ガス、石油といったさまざまなエネルギー資源も無限ではありません。近い将来に枯渇する可能性が指摘され、代替エネルギーや、新しい技術開発が求められています。

「持続可能」が目標とされる背景には、この世界は「このままでは持続不可能である」という危機感があります。

「持続可能」が目標とされる背景には、この世界は「このままでは持続不可能である」という危機感があります。

た、その経済成長にはどこまでの開発が許容されるのでしょうか。あるいは逆に、環境の保全のために、何をあきらめるべきなのでしょうか。それらの調整はどのように行われるべきでしょうか。それは、さまざまな権力や経済力による力関係や、上からの押しつけられた目標ではなく、話し合い・意見交換を行い、合意形成を図らなければなりません。

言い換えると、どのような社会を求める、どのような未来を作っていくのか、それは、私たち一人ひとりが、主体性をもって考え、語り合い、関わる中で作り上げていくべきことといえるのです。

これから幸せは?

これから幸せは? これは、私たち一人ひとりが、SDGsをよく見ていくと、しばしば対立的な関係になる目標があります。たとえば、目標8では経済成長が、目標9では産業技術革新が掲げられていますが、その一方で、目標13、14、15では、気候変動への対策、あるいは海、陸の自然保全が対象とされています。これら「経済成長」と「環境保護」は、両立するケー

スもあります。しかし、多くの場合、開発と自然保護は対立する関係になりがちです。これまでの経済成長をめざすべきなのでしょうか。ま

たのではありません。しかし、実際にはその先に続く未来までを見通して、続けていくことができる(持続可能な)形で、丁寧に暮らしていくこと。そういうことが強く求め

たのではありません。しかし、「誰一人取り残さない」という宣言がされるのには、実際には今、現に、必要な支援や助けが行き渡らずに、取り残されている人がいる、ということがあります。実は、

Column

お寺で SDGs を考える

2018年6月23日(土)、兵庫県尼崎の西正寺でSDGsをテーマにしたイベントを開催しました。これは「テラからはじまるこれからのハナシ。」といい、お寺を場として、社会課題・社会的なテーマを学び、語り合いうイベントです。2016年からこれまでに5回、不定期ながら、さまざまな社会課題を学び、語り合いうイベントとして開催してきました。6回目のこの日は、SDGsがテーマとなりました。

SDGsに関する専門的な講師によるレクチャーと、参加者同士の話し合いのプログラムに、この日は30人余りの参加者が集いました。60分のレクチャーのあと、それと同等以上の時間、参加者同士の語り合い（ダイアログ）を行います。参加者は、地域でさまざまな活動をする市民、行政や企業に勤務する人、あるいは学生など、年齢も10代から70代といった多種多様な人が集いそれぞれの立場や考えを語り合いました。

一般の参加者のみで行われる話し合いで、それがどう展開するのかという心配をされるかもしれません。しかし、毎回この参加者同士の話し合いは、時間が経つほど、参加者の関心と熱気は高まり、予定の時刻が過ぎてもまだ「話し足りない」という雰囲気に満ちあふれています。話し合うほどに参加者の課題に対する関心と想いは高まっているような状況になっているのがとても印象的です。そして、この日もそんな状況で話し合いが展開していました。

地域にあるお寺でSDGsを考え、お寺や地域で何ができるかについて、語り合いを行ったわけです。もちろん、そこで学び・気づきがあること、新しい取り組みが展開していくことも意味あることですが、この会では、実はその取り組み自体がSDGsや、これから社会に関して意味あることではないかと思われました。

あることは多いかと思われます。

参加者の声をいくつか紹介してみたいと思います。

- ・「年齢や立場が異なる人、まったく違う考え方を持つ人の意見を聞くことができたのが新鮮だった」。
- ・「お寺という場だからこそ、多様な人が集い、自由に意見が交わせる場所だったように思う」。
- ・「他の場所では、なかなか経験できないような、違う意見であっても大事にして、一緒に考えることができる機会だった」。

立場の異なる人、さまざまな考えを持つ人との意見交換が行えたこと、またそれが、お寺という場所であったからこそ成り立っていた感覚や関係性があったのではないかと参加者の何人もが感じていたことが非常に印象的でした。

また、自分自身がある社会課題の当事者としての苦しみを抱えた方が、「仏さまの前だからこそ、自分自身のあり方に素直でいられるように思う」と、お寺という場、仏さまという方の前だからこそ自分自身の存在が認められたという感覚を語ってくれました。これには、主催者としても感銘を受け、とても心に残りました。



参考の中には、立場の違う人の意見を聞いて、自分の考え方を見直した、新しい思いを抱き、積極的にその問題に関わりたいと思うようになったという人もいました。特に問題の当事者自身の声、あるいはすでに課題に深く関わり、よく知る人の声に触れたことなどが、そういうきっかけになるようです。

お寺を場として、さまざまな年齢や立場の人とフラットな関係で話し合うこと。そのなかで新しい気づきやつながりを得て、社会や課題に対する新しいつなぎをえること。それが、お寺という場で起こっているということはもちろん、お寺だからこそ成り立つ立場の違い、意見の違いを持つ人同士の関係性が、参加者自身も感じつつ行われていること。こういったことは、これから社会の目指すべき方向を、一人ひとりが主体的に考え、さまざまな意見の調整や、協働して課題に取り組む素地を育むためにも、非常に意味のある場ではないかと思われるのです。

そもそもお寺は、人が「集う場」、「学ぶ場」、「語らう場」でもありました。お寺でできること。お寺だからできること。そういった一つひとつの積み重ねをしていくことが、日本各地にあるお寺の存在の意味を捉え直すこと、またこれからの中社会で「お寺」があること、僧侶・仏教徒でいることの意味を見つめ直すきっかけにもなるのではないかと思っています。



▲昨年11月8日に築地本願寺で行われた次世代リーダーズサミット
仏教×SDGsシンポジウムのようす。

しかし一方で、アフリカの一部地域や、世界の最貧困層の貧困率は、それ以外の地域ほどに改善していな
いという現実がありました。数値的には、「貧困」は1／3に減少しま
したが、その内実を見れば、救われ
やすい人・地域ほど、容易に多く支
援が届けられた一方で、より深刻で
困難な中にある人・地域ほど、支援
が行き渡りにくく、受け取ることが
困難である、という現実もあったの
です。これは、数値だけでは分から
ない、いやむしろ、数値によつて見
落とされがちな苦しみ、困難がある
のではないかでしょうか。

ます。また日本国内にも、周縁化され、声を上げることさえできない困難の中にいる人がいることを忘れてはいけません。

身の回りのものひとつとっても、それが由来するところ、そして行き着く先にいるであろう世界中の誰かを想像することもできるはずです。また、100年・1000年先にまで想像を及ぼすこともできるはずです。もう一度、丁寧に、今共に生きている人たちのために、そして将来の世界・地球のために、自分たちの身の回りをSDGsという考え方を通して、見つめ直してみませんか。

SDGsの前身の国際目標に
MDGsというものがありました。
2000年から2015年までに、
貧困や飢餓を半減することなどを中
心とした国際目標でした。そしてそ
の目標は、一定の成果を上げ、統計上
極度の貧困や飢餓を1／3ほどにま

残念なことに、私たちの身の回り

「ない」という宣言を掲げている背景には、このような数値の影に隠され取り残された人がいたことがあります。そしてそういった人たちを、誰一人取り残すことなく、あらゆる人とと共に私たちは生きていくのだ、という強い思いが込められています。

- 目標1..(貧困) 貧困をなくそう**
「あらゆる場所で、あらゆる形態の貧困に終止符を打つ。」

目標2..(飢餓) 飢餓をゼロに
「飢餓に終止符を打ち、食料の安定確保と栄養状態の改善を達成するとともに、持続可能な農業を推進する。」

目標3..(保健)すべての人に健康と福祉を
「あらゆる年齢のすべての人の健康的な生活を確保し、福祉を推進する。」

目標4..(教育)質の高い教育をみんなに
「すべての人に包括的かつ公平で質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する。」

目標5..(ジェンダー)ジェンダー平等を実現しよう
「ジェンダーの平等を達成し、すべての女性と女性のエンパワーメントを図る。」

目標6..(水・衛生)安全な水とトイレをみんなに
「すべての人に水と衛生へのアクセスと持続可能な管理を確保する。」

目標7..(エネルギー)エネルギーをみんなにそしてクリーンに確保する。」
「すべての人に手ごろで信頼でき、持続可能な近代的なエネルギーへのアクセスを確保する。」

目標8..(経済成長と雇用)働きがいも経済成長も
「すべての人のための持続的、包括的かつ持続可能な経済成長、生産的な完全雇用およびディーセント・ワーク（働きがいのある人間らしい仕事）を推進する。」

目標9..(インフラ、産業化、イノベーション)産業と技術革新の基盤をつくろう
「強靭なインフラを整備し、包括的で持続可能な産業化を推進するとともに、技術革新の拡大を図る。」

目標10..(不平等)人々の不平等をなくそう
「国内および国際間の格差を是正する。」

目標11..(持続可能な都市)住み継ぐられるまちづくりを
「都市と人間の居住地を包括的、安定制、強靭かつ持続可能にする。」

目標12..(持続可能な生産と消費)つくる責任つかう責任
「持続可能な消費と生産のパターンを確保する。」

目標13..(気候変動)気候変動に具体的な対策を
「気候変動とその影響に立ち向かうため、緊急対策を取る。」

目標14..(海洋資源)
「海洋と海洋資源を持続可能な開発に向けて保全し、持続可能な形で利用する。」

目標15..(陸上資源)陸の豊かさを守ろう
「陸上生態系の保護、回復および持続可能な利用の推進、森林の持続可能な管理、砂漠への対処、土地劣化的阻止および逆転、ならびに生物多様性損失の阻止を図る。」

目標16..(平和)平和と公正をすべての人に
「持続可能な開発に向けて平和で包括的な社会を推進し、すべての人に司法へのアクセスを提供するとともに、あらゆるレベルにおいて効果的で責任ある包括的な制度を構築する。」

目標17..(実施手段)パートナーシップで目標を達成しよう